創星

SOUSEI

vol.12

創星

⑫

CONTENTS

創星

2015 10月 vol.12

ひかるくんの恋	竹中優子	3
ももだろう	詠人不知	5
間々えいよの勝手にエッセイ①	間々えいよ	7
一角獣星座	松田定幸	11
私のいない明日のためのそのイチ	馬場貴生	12
なにがでるかな？	マチコ・サイコロトーク	16
間々えいよの勝手にエッセイ②	間々えいよ	17
クラシック音楽・教養のお時間	天沼太郎	20
勝抜戦と総当と選手権試合	松田定幸	23
CLOSE TO HOME	一路真実	27
水彩のスケッチ	To’s job	36
Philosophy of Stardustbooks		38
編集後記		39

☆ 表紙デザイン　間々えいよ

短歌十首　ひかるくんの恋　竹中優子

*短歌十首

ひかるくんの恋

竹中　優子

ミスドにてグラタンパイを食べているなかしまひかるくんの失恋

三十分になったら出ようと決めたからただ待っている二分間

父さんみたいな料理人になりたいって坊主頭の進路相談

海に行った四人の中でカップルが一組できて秋には別れた

夏のおわりのスイミングからの帰り道それでひかるくんは誰が好きなの

痛みがなくても続けて飲んでくださいと渡されたままの白い錠剤

沢山の色とか言葉とかあってそのどれもが当てはまらなくて

生まれたてみたいな顔でひかるくんは伝えられたか分からないという

テスト明けに映画に誘う作戦がテスト前日に振られてしまう

着ないままだったTシャツ　若いって言葉はあんまり好きになれない

ももだろう　詠人不知

ももだろう

詠人　不知

むかしむかし、あるところに、じじいとばばあがすんでいました。

じじいは、やまへ、しばかりに、ばばあは、かわへ、せんたくにいきました。

ばばあが、かわでせんたくをしていると、どんぶらこ、どんぶらこと、なにやらおおきなものがながれてきました。

それは、これからのじじいとばばあの、のこりすくないじんせいをおおきくさゆうするであろう、おおきなももでした。

ばばあは、むかしからすききらいがあり、ももがどうしてもくえません。

てらごやのはいきゅうでも、いつもは、やすみのひとのぶんまでとりあげてくうので、くいしんぼういやしんぼうばばあとしてゆうめいなのに、ももものときだけは、ふぁんきーに、げろっぱしてしまいます。そんなあくむが、ばばあののうりをよぎりました。

「ちっ、ももか。わしゃのきらいなものだで。」

ばばあは、ももがちかくにながれてきているのに、ひろうどころか、かんぜんにしかとしています。

そんなばばあのようすを、ももものなかにはいっているくそがきが、ももものわれめからみています。

「ちっ、あのばばあ。なにしかとしてんだよ。さっさとひろえや、ぼけが。」

しかし、ばばあは、ももをひろうどころか、かんぜんにしかとをきめこみ、じじいのきたないふんどしを、ぶつぶついいながらあらっています。

「ちっ、じじいが。まじできたねぇふんどしをあらわせんなや、ぼけが。」

そのころ、じじいは、やまでけんめいにしばかりをしています。

「さぁ、きょうのしごとをがんばったら、ばばあがかわでももをひろってきてるぞ。なかにはかわいいあかごがはいっているからな〜。これからは、いくじいとして、しばかりに、こそだ

てにとがんばらなくっちゃ。」

じじいはどきどきしすぎて、きついしばかりも、はをくいしばり、がんばっています。

いっぽう、ばばあはといえば、ももをかんぜんにしかとし、じじいのきたないふんどしあらいにいらつき、とおいめをしながら、くわえたばこでかわをみています。

「ちっ、そもそも、あのじじいといっしょになったのが、おおきなまちがいやで。」

ばばあは、ぶつぶついいながら、ぬすんだばいくにまたがり、いえにかえることにしました。

いえにかえりつくと、じじいが、めをきらきらかがやかせ、いえのまえでそわそわしながらまっていました。

ばばあが、ばいくをとめようとしていると、じじいがさんぽをまちわびたかいいぬのごとく、かけよってきます。

「もっもっもももは?」

「はっ?もも?しらんがな。」

「しっ、しらんて、あんた、ももやぞ。きょうは、ももをもってかえってこないといかんやろ。」

「なんでやって。わしゃ、ももきらいや。」

「すきとかきらいとかのもんだいじゃないって。きょうは、ももがいるやろ。」

「ちっ、うるせぇな。そんなにももがくいたいなら、いちばでこうてこいや。」

「く、くいたいんじゃないわ。ももからあかごがうまれるんやないか。」

「ちっ、じじい、なにぬかしとんや。とうとうほけがきよったか。」

「ほけやないって。ももからな…」

「うるせぇ!!ももももいうな!!たんなるももだろうが〜ぁぁぁ!!」

も〜もだろうが〜ももだろが〜♪

きゃすと：じじい・ばばあ・ももの くそがき

いぬ・さる・きじ・おに（ゆうじょうしゅつえん）

おしまい。

間々えいよの勝手にエッセイ ＝ 田舎者シリーズ１

「議案」

ズボンを買いに行った時の話。

紺色のズボンありますかと尋ねてみると、店員さんは言った。

「あー、ネイビーのパンツですね」

「・・・・はい」

この一行の空白と・・・・で、私が考えたことが何なのか、皆さんはわかるだろうか。

わざわざ私の言葉を訳された、ということは → 訳された自分は → 田舎っぺ →田舎っぺは → 恥ずかしい、という気持ち。

「ネイビーは結構、色を合わせるのが難しいですよね」
と店員さんが言う。ネイビー → 色合わせが難しい → 私はその事を知らない → 知らない自分は →田舎っぺ → 田舎っぺは → 恥ずかしい、というダブル恥ずかしい気持ちが私の購買意欲を完全に失せさせた。

そもそも私がなぜそのような言葉を使ったのか。

原因は普段使っている言葉にあると考える。我が家は、ベストをチョッキといい、ティッシュをチリ紙という。

もし飲みものをこぼして、他の人から「チリ紙あるよ」と言って渡されたら・・・ちょっと驚きますな。

これは根本的に改善しなければ、一生田舎っぺ丸出しで私の人生が終わってしまうのではないか、と思い考えた。

私は家族に議案を提出した。

今日から、現代に合った言葉を使いましょうと。しかし、母親こう述べた。

もしお母さんが店員に『ネイビーのパンツありますか』といったら、下着をもってくるかもしれない。それなら、ズボンの方が間違いなく通じる。また、チョッキやチリ紙も、言われたら何のことを指すのか相手は分かるはず。恥ずかしく思うならば、あなたひとりが気を付けるべきであり、我々家族に無理強いする必要性はない、と。

さらに議長は言った。

自分が、田舎者だということをまず認めなさい。すると恥ずかしくなくなる。田舎者なら、それらしく、堂々とズボン、チョッキ、チリ紙と言ってやろう、と。

この言葉は聴衆者（と言っても父親だが）を引きつけ、私の議案は即、却下された。

だがここで再び議案を提出したい。もし私のような言葉を使っている人がいたら、驚かな

いほしいのです。微笑んで「チリ紙ありがとう」と言ってほしいのです。

どうか、どうか、あなたの中で、この議案が通りますように。

— Monoceros —

私のいない明日のためのそのイチ

馬場貴生

ただ、幸せになりたいだけなんです。

私は、世界が幸せに満ちていると信じています。だから、私も幸せになれると信じているのです。

たとえ、親から「あなたなんて生まなければよかった」と言われても、友人らしい友人がいなくても、30過ぎて処女だとしても、仕事先で誰も話してくれなくても。

私は、幸せだと思うのです。

なぜなら、こうして生きているから。

昔からそうでした。

誰も、私のことを見てくれないのです。

何もしていないのに、皆から嫌われ、「なぜ、このように生まれてしまったのだろう」と悩みました。

「きっと自分にいけないことがあるんだ」と、いろんなことを改善しようと試みましたが、何もうまくいきませんでした。

大人になっても、それは変わらず、自己啓発系のセミナーの先生に舌打ちされ、占い師の先生は唾を吐きました。

仕方がないので本を読みました。

本は私を嫌うことはありませんでしたが、なぜか私の読む本は水浸しになったり、燃えたりしました。

それでもその中に、ランニングで人生を変えたという人の本があって、何でも、全く走れなかったのが、少しづつ走れるようになって、自身がついてきて、人生もうまく回るというものだということです。

走るだけで人生がうまくいくのであれば、そんなにいいことはありません。

物は試しと、私もすぐに走ってみました。

最初は、1キロ走るのも大変でしたが、毎日走っていると、一か月たつ頃には、何とか10キロ走れるようになってきました。

自分に10キロも走れるとは思いもよらず、その事実だけで幸せな気分でした。

その時です。

目の前に光が飛んできて、私の頭を貫きました。

私は、意識をなくし、そのまま倒れてしまいました。

気がついたら、家のベッドで寝ていました。

何だったのだろうと思い、起き上がると、頭の中で声がしました。

ずいぶん偉そうな声でした。

「英雄になりたくはないか」

何者かの声が聞こえた。

「私は、お前を探していた。今、地球には危機が迫っている。世紀の大魔王が地球に迫っているのだ。私は、地球を救いに来たのだ。しかし、そのためには、地球人の身体を借りねばならぬ。私は地球では活動できぬのだ。どうか君の身体を貸してもらいたい」

私は「信じられない」と答えました。

「信じないのは構わないが、それではお前は何もなさないまま、死んでしまうことになるが、いいのか?」

私は考えました。

私は何を果たしたこともありませんでした。このまま自分が何者かわからずに死ぬのは御免です。

それなら、この何か不思議な体験でも、ウソでもいいから信じてもいいと感じました。

私は、そう聞いて、すぐに自分の身体を彼に貸しました。

地球に近づいている大魔王は、この星に異常気象という形で、姿を現していました。

「お前はいつも通りに生活していればいい」と彼は言いました。

私は言う通りにしました。

いつも通りにランニングを再開しました。目標ができると、いつもお嬢に頑張れる気がします。

その月、私は 20 キロを走ることができました。ほとんど歩いたけど。

でも、それはとてもうれしいことでした。

「自分でもできるじゃないか」

そう思えました。

風が心地よく、その日の晩御飯がとてもおいしく感じました。

私は、もっといろんなことができるのかもしれない。

そう感じ、マラソン大会へのエントリーを決意しました。

身体が丈夫になれば、世界を救うときももっと有利になるかもしれません。

何より、自分がフルマラソンを走れるようになることは、私の人生を変えるかもしれないと思いました。

でも、頭の中の救世主はそんな私に冷ややかです。

「そんなことをしても無駄だ」
「なぜ、無駄なことをする」と。

無駄でしょうか?
そうやって、自分が成長すれば、あなたの役に立てるかもしれないと、私は救世主に言いました。

「君はなにもしなくていい」と彼は言いました。

「私は、『死んでもいい』人間を選んだのだ。君が生まれついて、何をしてもうまくいかないのは、君が誰からも好かれないのは、私を受け入れるためなのだ。

私は、人に憑依して、その人間のエネルギーを吸い尽くして変身する。その際、憑依されたものは死んでしまう。

その人間が、皆に好かれていると死ぬときに悲しみが増えるだろう?

君はそのために生まれてきたのだ。
世界を救うために、誰にも好かれず、好かれる条件も持たずに、生まれてきたのだ」

愕然としました。
私が親からも愛されず、友達もできず、コンビニの店員にも好かれないのは、こう言う理由があったのです。

でも、すぐに納得もできました。
私の運命を言うやつです。
自分のこれまでの人生を振り返れば、その運命も受け入れることもできます。

仕方がないと思いました。

何をする気にもなれませんでした。

死んでしまう自分を受け入れようとしました。

でも、死んでしまう前に、自分が生きた実感が欲しいと思いました。

私はマラソン大会への練習を再開しました。

自分の足で、ゴールテープを切りたい。
それが自分が生きた証になると思ったのです。

当日、異常なまでの好天気でした。

スタートが鳴り、私は多くの人と一緒に走りはじめました。

練習をした通りに、ペースを守りながら走っていきました。

すぐに足が痛くなりました。

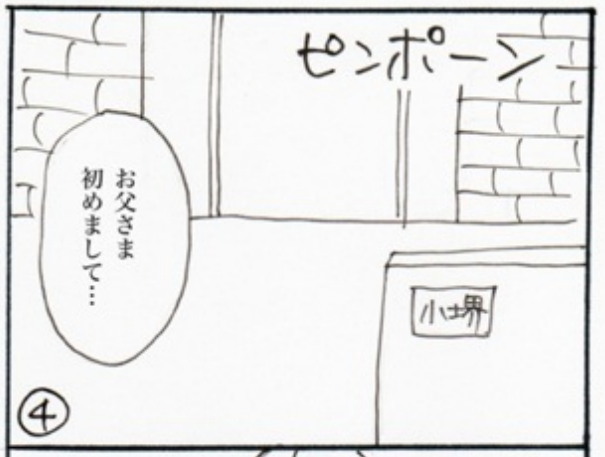
半分も行かないうちに、いろんなところが痛くなりました。
シューズの紐も切れました。
本当に私はうまくいかない。
でも、走り続けました。
何時間も、何時間も。
私の無様な走る姿を見て、笑う人がいました。
でも、走り続けて、ゴールが見えました。
その時、いつの間にか空は曇っていました。
雲の中に巨大な顔が見えました。
あれが、大魔王。
ズキッと、背中が痛みました。
ものすごい痛みです。
背中が避けるような。
死んでしまいそうな痛み。
救世主が外に出ようとしている。
私を殺して、変身しようとしている。
これが私の運命。
そうか、このものすごい痛みとともに、世界は救われるのだ。
これが私の運命。
空がうなるように、雷がとどろいています。
大魔王が笑ったように見えました。
途切れそうな意識の中で、その先にゴールが見えました。
私は死んでしまう。
世界は救われる。
これでいいのだ。
これで。
これが私の運命なのです。
ゴールが見える。
最期の瞬間、私は「いやだ!」と叫んでいました。
その後世界が救われたのか。
私には確かめることができませんでした。

完

ハートフル♥7コマ

なにがでるかな？

マチコ・サイコロトーク



間々えいよの勝手にエッセイ②　間々えいよ

間々えいよの勝手にエッセイ ＝ 田舎者シリーズ２

「漬物」

地下の食堂で、日替わり定食を頼むと、必ず漬物がついてくる。蛍光ペンの色をしたタクアンを見て、「キェェェー」と発狂したくなった。

十代の頃、私は絶対に漬物を食べなかった。この多感な時期は、田舎を代表する食べ物「漬物」はちょっと、いや絶対に頂けなかったのだ。

ちょうど秋だったと思う。両親が炊きたてのご飯と、近所の漬物名人からもらった白菜の漬物でご飯をたべていた。

炊きたての白ご飯をハフハフさせながら

「うまぁい、うまぁい、あー、うまぁい」

そう言われたら、だれだって食べたくなる。でも田舎くさい食べ物だしな、でもおいしそうやし今日ぐらいいいか、でも今まで絶対食べなかったのに・・・。と私の中で天使と悪魔が押し問答。しかし、目の前は炊きたてのご飯。ハフハフ。両親の笑顔。

クソ！田舎だろうが都会だろうが、もう関係ないぜ！

白菜の漬物に醤油をたらし、ご飯にのっけてパクリ。

この時の自分を漫画で表すなら、夢中で白菜の漬物がのったご飯をかき込む人物と、集中線。そしてセリフ、

「今まで食べなかったのが悔やまれるくらいのうまさだっ」

いまではすっかり漬物が好きになった。だからこそ、蛍光ペン色の漬物が許せんのです。漬物にこだわった定食。それこそがキングオブ「昼ごはん」。十代の私よ、きらりと光る脇役に注目して定食を楽しむ、そんな三十代になりましたよ。

ひひひ
今まで食べなかっただのが悔まれるくらいのうまさだっ
へへへ

クラシック音楽教養のお時間

天沼　太郎

第 10 回　嗚呼！問題演奏会たち

こんにちは、ブラック天沼です。

これまで、私の体験した素晴らしい演奏会を紹介してきました。素晴らしい演奏会はとことん素晴らしいものです。人生を変えます。価値観を変えます。人の運命も変えます。いいか悪いか別として。

さて、それらの演奏会のことを思い出しながら書いている一方、私の頭の中ではそれとは反対の、それこそ思い出すのもイヤになる、そのくせ決して忘れられない失敗演奏会の存在が、少しずつですが増してきました。そして、それらについて書きたいという思いが次第次第に膨れあがってくるのです。そんな演奏会、紹介する意味はあるのか？それを考えているうちに思い出したのが、数年前聞いたとある方の言葉、「演奏は演奏者と観客で作るもの」。

その言葉を聞いたときは、「演奏って、演奏家のするものじゃないの？歌声喫茶じゃあるまいし」ぐらいにしか考えませんでした。ところが、先の話とこの言葉が、ある日突然リンクしたのです。演奏はどうやら、演奏者と観客で作るものかもしれません。

演奏会1.　棒振りおじさん

演奏：　バンベルク放送響
演奏曲：　ブラームス　交響曲第 1 番、ベートーヴェン　交響曲第 5 番
会場：　アクロス福岡

演奏会の細かい情報は覚えていない。けれど、今回はあまり関係ないので割愛。

まず一言、素晴らしい演奏であった。ドイツのオーケストラらしく、これ見よがしに重厚で、それでいてリズムがくっきりしている。低音がホール全体に響き渡り、その上で高音が軽やかに歌を歌う。伝統的なドイツの楽団による音作りである。

曲の流れに沿って書いていくと、ブラームスの冒頭、あの巨大な序奏はこれ見よがしにホールに響き渡り(感心している)、それに続く主題は緊張感をはらんだまま曲を展開させる。けだるい2楽章でも緊張感が途切れることなく、最終楽章で現れるあの有名なメロディは全ての苦しみからの解放のように響き渡る、はずだった。

冒頭の序奏までは良かった。主題が始まったところで、私の右斜め前に座るおじさんが、おもむろに右手を突き出し、曲に合わせて、おそらくかなり力んでいたのだろう、拳を握った腕をぶるぶると震わせ始めた。何かの儀式だろうか？そして、主題に合わせて腕をゆっくり振り始める。

最初のうちは、変な人もいるものだなと眺めていたのだが、気がつくと大事な演奏が耳に入ってない。ついつい動くその腕を目で追ってしまうのだ。もちろん、そんなもの見なければ良い。けれど、人間の習性で動くものを見てしまうのだ。目を閉じたり(演奏が BGM みたいで集中できない)、上を見たり(照明のシャンデリアはきれいだ)、手のひらでその腕を遮ったり(腕が疲れる)工夫はする。けれど演奏への集中力が妨げられることおびただしい。もうなるようになれと、右目を閉じ、右手で視界を遮って演奏を聴いた。

休憩時間になってすぐ、席を移動する。満員の公演でなくて良かった。

後半、ベートーヴェンの交響曲も良かった。特に個性的な演奏というわけではないけれど、音楽が最後の戦いへ向けてばく進する様子が直に伝わってくるような素晴らしい演奏だった。しかし、視界の端であっても、先ほどのおじさんの動きはちらちら目に入ってくるのである。私は席を移動したけれど、見るとさっき隣にいた女性(手でおじさんを見ないようにしていた)はまだその席に座って音楽を聴いている。なんとも興ざ

めな一夜であった。

個人的な印象だけど、福岡では安い席に、関東では高い席にその手の困った事件に遭いやすい気がする。音楽に没入するのは悪いことではない。けれど、こういう体験はもうしたくない。

演奏会2.　超マジメ演奏会

演奏：トレバー・ピノック指揮　水戸室内管弦楽団
演奏曲：ハイドン：交響曲第 102 番変ロ長調 Hob.I-102
　　ハイドン：チェンバロ協奏曲ニ長調 Hob.XVIII-11
　　モーツァルト：交響曲第 38 番ニ長調 K.504「プラハ」
会場：アクロス福岡

名前出しちゃっていいかな？まあ、影響のある連載でもないだろうから、そのまま書きます。

何がこの演奏会をおかしなものにしたのだろうか？指揮者のトレバー・ピノック氏は、この演奏会の後、自身が組織したイングリッシュ・コンサートを率いて、バッハ作曲「マタイ受難曲」の素晴らしい演奏会を行った。だから、決して能力的に問題がある指揮者ではない。オーケストラの方も、あの齊藤秀雄の薫陶を受けた団員を中心としたオーケストラ。世界中で活躍する音楽家たちからなる団体である。いったいどうしたことだろう？

さて、本演奏会。演奏が始まってすぐ、ヴァイオリンの音がぴったりそろっていることに驚いた。「一体となって奏している」レベルではない。1つの楽器のように、音の始めから終わりまで、ぴたりと重なっているのだ。想像して欲しい、10 人のランナーが一糸乱れず 100 メートルを疾走している様を。これはもしかして、凄い演奏になるのではないか

という期待はすぐに裏切られた。どうしたことだろう、音楽がちっとも熱くならない。曲が前に進んでいかない。メロディは歌われないし、リズムも弾まない。100 メートル走と思ったら行進、それもスピード一定、モーター仕掛けの人形による行進である。モーターの動きに合わせてジージーと足が回転するだけである。いったい演奏者は何が楽しくて演奏しているのだろう？

かつて、オットー・クレンペラーという指揮者がいた。そのぶっきらぼというか、音楽に無関心というか、20 世紀後半の表現主義真っ盛りの時代に、何の解釈も交えずに淡々と、演奏をする異端の指揮者である。しかし演奏を聴いていると、何か巨大で得体の知れないものと対峙するような気分がしてくる。それに気づいて以来、私はクレンペラーのファンである。

この演奏からは得体の知れない怖さは伝わってこない。ただ単にマジメなだけである。教師の前で楽譜と首っ引きで、一音たりとも間違うまいと演奏をする学生みたい。パンフレットに書いてある、海外で急な停電に見舞われた際も演奏を続けたという話も、確かに凄い話ではあるけど、演奏内容とは関係ない。

ハノンだとか、バイエルといったピアノの練習譜曲はつまらない。聴くことを前提に作られてないからだ。しかし、それを聞かされるのはもっとつまらない。いったい、演奏者たちは何をがあったのだろう？

演奏会3：そして演奏は完成する

演奏：ウォルフガング・サヴァリッシュ指揮　フィラデルフィア管弦楽団
演奏曲：モーツァルト　交響曲第40番
　　ブルックナー　交響曲第4番「ロマンティック」

演奏会の多い関東に出てきて良かったことの1つは、いい演奏会を選べることである。福岡に住んでいるときは、多少危険な予感がしても、クラシック音楽を聴けるのはそれしかないという理由で、いくつもの問題

演奏会に出かけてしまった。その中でも特にひどかったのがこの演奏会。

モーツァルトが鳴り出してすぐ失敗したと思った。あの美しい40番、繊細な40番をここまで棒読みするか！サヴァリッシュは、マジメというキーワードで語られることの多い指揮者であるけれど、マジメってことは面白みがないことの裏返しではないか？いやいや、面白い面白くない以前に、演奏に全く神経を使っていない手抜き演奏。手を抜くにしても、もう少しマシな手の抜きようもあるだろうに。

しかし、それを上回る事件は演奏後。その救いようもない40番が終わったとき、あろうことか大歓声が上がったのである。サヴァリッシュが驚いた様子で振り返ったあの時の顔は忘れられない。歓声が、もしそれが嫌みから来る歓声ならぴったりである。ところが、その歓声は自己増殖的に膨れあがり、アクロス福岡でも珍しいスタンディングオベイションとなってしまった。まだ演奏会は半分である。アンコールに応えて、何度も舞台袖と指揮台を往復する指揮者。彼はあの時、何を考えていたのだろ。

もしかしたら演奏家一同、心を入れ替えて、後半は多少マシな演奏をするかもしれない。福岡タワーから桜島を探すような気持ちで迎えた後半は、多少マシになった気もしたけど、やっぱり適当に流している感じ。最後の取ってつけたような白々しい盛り上がりには怒りさえ感じられた。しかし、それ以上に、終演後狂ったように拍手を送る観客たちを空恐ろしく思った。ハクシュスルカンキャクハ、イッタイナニヲキイテイタノダロウ。アンコールを待たずして帰ったのはその時が初めてだった。

演奏会4.　アンコール

演奏：　エリック・ハイドシェック
演奏曲：　ベートーヴェン　ピアノ・ソナタ第 8 番　ハ短調　op.13 「悲愴」
創作主題による 6 つの変奏曲　ヘ長調　op.34
6 つのバガテル　op.126
ピアノ・ソナタ第 31 番　変イ長調　op.110
アンコール曲　多数
会場：　サントリーホール

ハイドシェックの人気は、評論家の宇野功芳氏によるところが大きい。評論家の力は凄いものである、今回あの巨大なサントリーホールが満席になったのだ。

ハイドシェックは、故国では忘れられたピアニストであるとも聞く。そのためだろうか、ステージに現れたハイドシェック氏は、私には「何かだまされているのではないか？」という表情を浮かべているように思える。私は思わず、どっきりカメラを思い出してしまった。

肩パットの合っていないダブダブの舞台衣装は、いったい何十年前に作ったものだろう。その老ピアニスト、エリック・ハイドシェックの弾くベートーヴェンは、彼の姿と同じくずいぶん危なっかしかった。ほんの1、2週間前、同じホールで同じピアノ・ソナタ31番を、ピエール＝ローラン・エマールという俊英ピアニストが、実に切れ味鋭い演奏で聞かせてくれたばかり。ハイドシェックは運も悪かった。

けれどその日、時折しびれるような素晴らしい瞬間があった。それこそ曲を見失ったような場面すらあったのに、音楽が死んでいない。

曲が終わるたびに大歓声が上がる。それに気を良くしたか、次々とアンコールを弾くハイドシェック氏。アンコールは大盤振る舞いで、次から次へとお気に入りの曲や、(忘れてて途中で止めてしまった！)自作の曲まで出てくる。演奏の合間にステージ中を歩き回り、観客に手を振る。先ほど険しい顔でベートーヴェンを弾いていたのが、ずいぶん柔らかい表情になり、その音楽も自由闊達、融通無碍、音楽は自由に呼吸し、歌い、飛び跳ねる。私は、こんな音楽が聴きたかった！

勝抜戦と総当と選手権試合　松田定幸

勝抜戦（トーナメント）と総当（リーグ）と選手権試合（タイトルマッチ）

松田 定幸

夢を叶えるという事は、

トーナメント戦を 勝ち抜くようなもの。

途中で敗退すると、望む物は得られない。

人生を送るという事は、

リーグ戦を 闘い抜くようなもの。

勝とうが負けようが、

最後まで 参戦し続けねばならない。

愛する人を得るという事は、

タイトルマッチ に挑むようなもの。

負ければ 新たな挑戦が、

勝てば それを守るための闘いが 待っている。

CLOSE TO HOME

一路 真実
（イチロ　マミ）

趣味だった海外旅行が仕事になり、ようやくライターとして独り立ちした時に母親が病気になった。日に日に衰えていく母を残して外国を旅する僕に、親戚は口をそろえて海外になんて行くべきではないとなじった。けれど、ちょうど雑誌の新連載が始まったところで、どうしても行かざるを得なかった。いや、それは言い訳で、僕自身が母親の最期よりも仕事をとった。ただ、それだけだ。

父が他界してからというもの、母一人子一人の生活で、誰よりも僕を支えてきてくれた母の傍を離れて、僕は飛行機に乗り込んだ。旅先の国から頻繁に手紙を出したけれど、母からの返事はない。それは、宿泊先を転々としながら世界各地を訪問していた僕が居所を書かなかったからで、当たり前のことだった。

母は我慢強い人間だ。昔からそうなのだ。病気になっても、病院に行かず家で寝てれば治ると言う。今回もそうだった。僕が旅に出る直前まで、自分が入院することを黙っていた。珍しく、仕事はどう

なんて僕の様子をさぐるような電話を入れてきて、連載の話を知ったものだから、僕が旅に出るまでの間に家で病気を治そうとした。だから僕は、母の病気がどれだけ進行しているのかも全然気付かなかったのだ。

そんな母親が亡くなったという報せを受けたのは、コスタリカの海だった。夕日が海に沈んでいく。赤く染まる波の隙間から、日本からの声が小さく聴こえた。

親戚は、僕の帰りを待たずに通夜をすませてしまった。ようやく火葬場に現れた僕の姿を見て、親戚は「親不孝者」と罵った。間違いないから何も言えなかった。

木の箱に納まった母の顔を小さな窓から覗いた時、その顔は何だか別人のようで、本当にいなくなったのか実感がわかなかった。

僕のことを散々罵った親戚たちが、最後に言った。

「あんたが押しなさいよ」

目の前にある赤くて大きなスイッチが何を意味しているのか考える暇もなく、僕は言われるままに静かに指を置いた。僕の位置からは見えない、たくさんの視線が背中に刺さるような気がした。何の正義感か知らないけれど、唯一の悪者を見つけたかのように、僕を憎みながら、また、僕が今成し遂げようとしていることへの期待感を入り混ぜた、冷たくて熱い視線だ。もう何も考えまいと、ただまっすぐにスイッチを押した。ガチャンという音と共に、機械的なブーンという音が響く。背後で、誰かがすすり泣く声とその場を離れて行く足音がする。その日、僕に唯一与えられた仕事は、火葬のボタンを押すことだった。

世界を旅していると、人は争いに次ぐ争いを続けてきたことがわかる。破壊と再生の繰り返しだ。母が亡くなった報せを受けたコスタリカは、旅行記最後の地だった。僕は、地球の裏側で、幻の鳥ケツァールを待っていた。カメラを持ち、ジャングルの中に身をひそめる。多様な生き物たちが丸い瞳で僕を見つめる中、虹色の体をした鳥を探していた。その時、僕も単なる生物になっていた。ジャングルで暮らす、ちっぽけな人間という生き物。

不幸中の幸いというのか、連載が終わったばかりだったから、母の遺品整理のために少し仕事を休むことができた。戻った実家は、生活していた時そのままの状態で、ただ母だけがそこからすっぽり消えてしまったようだった。必要なものだけを残して、後は捨ててしまおうと、一つ一つ遺品を手に取る。母の遺品だけでなく、僕の物も膨大に残してあった。大学に入学する時に家を出て、その時に母に処分していいと言ったのだけれど、結局捨てきれなかったようだ。まずは自分の物から始めようと思い、懐かしい本棚に手を伸ばす。学生時代に賞をもらった作文、班長としてまとめた修学旅行の記録なんかも出てきた。初めて書いた雑誌のコラムや初めて連載した旅行記も、

全てきれいに綴じてある。
　これは、失ってしまったら二度と戻って来ないものだと思った。今どんなにお金を出したって買えやしない。僕の記録でもあり、それを取っておいた母の気持ちの具現化でもある。つまり、僕にとってこの家で必要なものは、思い出なのだ。記憶だけでは復元できない、形を伴った思い出。
　そう思っているうちに、母の遺品整理をするつもりが何だか僕の遺品をまとめている気になってきた。いやいや、僕はまだ死なないのだからと葛藤しているうちに、だんだん面倒になって、そのまま母の家に住みついてしまった。
　母が入院していた時の荷物を整理していると、僕が外国から送ったポストカードの山が出てきた。連載が始まった時に出した、ウユニ塩湖の写真。空と湖の境界が分からないほどの、透ける水色。無事に着いたことを短く書き記したハガキの下の方に、母の字で「お疲れさん。新天地でも頑張れ」と走り書きされていた。次に行ったバラモンガで見た、砂漠の神殿の写真。裏をめくると、僕の忙しない文字で「環境に慣れない」と書かれている。一枚目と同じように、余白に母の丁寧な字で「意外と神経質なのよね」と感想が書かれていた。母は手紙の返事が出せないもどかしさを、こうやって感想を記すことで解消していたのだ。それが母にとって心の支えであり、唯一僕とつながる方法だったのだ。
　風呂場でシャンプーを使い切ったことに気付いて、仕方なくボトルの中に湯を入れて振る。妙に泡立った液体を直接頭にかけて、コンコンとボトルの口をてっぺんに打ちつけた。風呂をあがって、戸棚を開けるとシャンプーの買い置きを見つけた。シャンプーだけではない。リンスやボディソープ、洗剤や歯ブラシなんかまで。なくなってもすぐ生活ができるように全てのものが揃えられている。僕のことを神経質だなんてポストカードに走り書きしていたけれど、その性格は母親譲りなんだよ、と心の中で母に話しかけた。
　全てのポストカードを読んでいくと、母の病状と気持ちの変化が見える。最初の頃は丁寧だった文字が、だんだん細かく震えていく。
「あんたが帰国するまでは頑張らないと」
　母の言葉は強かった。僕へのエールと同時に、母は自分のことを奮い立たせようとしていたのだろう。
「一人残したら、かわいそうよね」
「頑張れ、母さんも頑張る」
　最後の手紙にはこう書かれていた。
「もう心配いらないからね」
　それが何を意味するのか。僕にはよく分からなかった。
　――島さんが現れるまでは。
　ある日、突然訪ねてきた初老の女性は、ボストンバックを両手で持って玄関口に立っていた。母の知り合いだと言い、島美都子と名乗った。
「母は亡くなりました」

帰らせようとした僕に、淡々とした声色で「知っています」と答えると、「では」と部屋にあがろうとする。
僕は慌てて止めた。
「何で入ろうとするんですか」
きょとんとした顔で見つめると、その人は口を開いた。
「あなたのお母さんから、あなたのことを頼まれましたから」
「僕のことを？」
もうすぐ四十歳に手が届く僕のことを、頼むも何もないだろうと思っていると、彼女は一通の手紙を見せてきた。そこには、母の字で「息子のことをよろしく」と書かれていた。
母が頼んだのだから仕方ないとなぜかすぐにそう思った。やはり心のどこかで、ここは母の家だという認識でいるのだろう。母の大きな力には逆らえない。
それから島さんとの同居生活が始まった。だけど、島さんは母のことを全くと言っていいほど語らなかった。どういう関係なのか、どこで出会って今までどんな風に関わってきたのか。それは逆に、島さんがこれまでの人生をどう過ごしてきたのかを語らないのと同じことだった。
僕の方も特に興味はなかった。母の筆跡で書かれたあの手紙が全てを物語っていて、母は僕を島さんに託したかったのだ。ただそれだけで、島さんに今さら何を聞いても無意味に思えた。
島さんは、そうして何も語らないまま、自然と母の残したフライパンや鍋を使って料理をし、洗濯や掃除をし、僕の身の周りの世話をするようになった。
朝起きると、自分の他に誰かがいるのがわかり、胸の中でさわさわと音を立てる。大きなものに包まれるような気持ちで、寝ぼけ眼のまま起き上がる。食卓に立派な朝食ができあがっていて、「おはよう」と言うと島さんは茶碗にご飯をついだ。「いただきます」と箸をとろうとして、あっと思った。
「この箸、別のところに置いてなかった？」
「ええ。坊っちゃんが使っているんじゃないの？」
「違うよ。これは父さんの箸なんだ」
僕はそう言って立ち上がり、食器棚から別の箸を取り出して座った。
「じゃあ、もう必要ないわね」
僕は島さんの方を見た。その時、島さんは母の定位置だった場所に座り、母の箸を使って白いご飯を口に運んでいるところで、何だかひどく違和感を覚えた。この人は、母のようにそこに座っているけれど、母じゃないんだと。
「まあ、必要ないけど……」
使わないのだから、捨ててもいい。けれど、そうしない。そうしないことに特別な理由があるかと問われると、何も言えない。

僕の部屋にノック音が響き、パソコンのキーボードから手を離した。島さんが入って来て、コーヒーカップを机に置いた。
「お疲れさん。あんまり根詰めないで、休憩しながらやりなさいよ」

「わかってる」
すると、島さんは机にあった湖のポストカードを手に取った。
「まあ、これどこの湖？」
「ボリビア」
そっけなく返事をした僕に、島さんはどこか寂しそうな表情を浮かべた。そして、にっこり微笑むと、部屋を出て行きながら、声をかけた。
「ちょっと買い物に行ってくるからね」
何だかそういうやり取りが、やけに懐かしく感じた。学生時代はずっとこんな感じだったのだろうかとふと思い返す。深夜まで勉強に励む僕に、母は労いの言葉をかけて夜食を置いていった。その姿と島さんが重なる。
もしも、と思った。もしも、僕があの時、連載を受けて海外に行かなければ、実家に戻り、母と二人でこんな生活をしたのかもしれない。できなかった生活を母代わりの人とやり直しているような、そんな不思議な気持ちになった。

少しずつまた仕事を始めたが、これまでとは異なり、実家でできる程度までセーブしていた。今まで旅行ばかりをしていたから一つのところに留まって文章を書くことに慣れていない。ひとまず、毎日の出来事をエッセイに綴った。細々とした仕事で、軌道に乗るまでは旅で稼いだお金で食いつないだ。旅行ライターとして活動していた自分の文章を読んでくれる人がいるとは思っていなかったが、ありがたいことに地道な活動がまた連載につながった。
「島さん、それ」
島さんは、はいはいと言いながら食卓にあった塩を取って手渡す。皺のある指に赤い線が入っていることに気付いて、島さんの指を眺めると、視線に気付いて恥ずかしそうに手を隠した。
「けがしたの？　それ」
「庭の手入れしてたら、ピリッとしてね」
「もう自分でするのやめて、誰かに頼めばいいよ」
「そうね」

島さんが僕のために家の環境を整えようとしてくれているのはわかるし、それは僕との生活を守ろうとしてくれていることの表れだということも知っている。でも、島さんは母親ではないし、単なる家政婦でもないのだ。何だかそれが僕の心をざわつかせ始めていた。

雑誌の編集部とは、いつも原稿をパソコンでやり取りするだけだったけれど、僕が送った写真が届かなかったようで、編集アシスタントが謝罪を兼ねて、家までデータを受け取りに来た。
「池松美結です。今回はこちらのメール容量の問題で、ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」
二十代の若い女性が来たことで、浮足立ったのは僕ではなく島さんの方だった。
「さあ、どうぞどうぞ。美結さんはコーヒー飲めるの？」
「あ、いえ。お構いなく」
「そう言わずにあがっていってください
な。せっかく来られたんだから」

無理に僕の仕事場に美結を押しこむと、二人っきりにして戸を閉めた。島さんが出て行くと、美結が言った。
「御親戚の方がいらっしゃっていたのに、お邪魔してすみません」
「いや、島さんは親戚じゃなくて、母の知り合いなんだ。しかも、今は僕の同居人だよ」
僕にとっては自然な説明だったが、美結は若さゆえか訝しげな表情を浮かべた。
「一緒に暮らしてるんですか」
コーヒーを運んできた島さんに、美結は愛想笑いを見せた。
「坊っちゃんも、こんなかわいい方が知り合いにいるなら紹介してくれたらいいのに」
島さんは茶化しながら、カップを置くと、僕にウインクしてそそくさと出て行った。
何か勘違いしている。
島さんの姿が見えなくなると、美結は続けた。
「息子でもないのに、世話をしてくれるなんて不思議です」
「僕もだよ」
「尋ねたことはないんですか。二人の関係って、外から見たら何だか変ですよ」
美結は、明るい茶髪に柔らかいパーマをかけた、トイプードルのような小柄な女の子で、ふわりとした見た目とは裏腹に、核心をずばりと突いてきた。
「そうかな」
白々しく答えた僕に、さらに言葉を重ねてくる。
「そうですよ。私、旅行記の連載をされていた時から、ずっと先生の作品が好きだったんです。でも、最近のエッセイはあの時の鋭さがなくて、そういう柔らかい文章も良いんですけど……。それって島さんの影響じゃないんですか？」
美結は目を伏せると、少し考えた。
「生意気なこと言ってすみません」
そう言って見上げた瞳は、うっすらと雫をまとっている。吸い寄せられる魅力のある子だと思った。
晩御飯を食べた後、ゆったりとした時間を過ごしていた。昼間の美結の言葉を何度も考えていて、居間のソファに座って縫物をしている島さんの背中に、僕は語りかけた。
「あなたの息子でもないのに、どうしてこんなに良くしてくれるんですか」
島さんは驚いて振り返り、そしてふふっと笑うと、何も言わずにまた布に目を落とした。少し返答を待ってはみたものの、その沈黙がだんだん僕のことを責めているように思えた。母と息子。男性と女性。恋人と同居人。何かの線を引きたがっているのは僕の方で、島さんはそれを望んでいないのかもしれない。私たちの関係にその線は必要なのと無言で問いかけてくるようで、僕はその場から立ち去った。
エッセイが一本書き上がり、次の仕事をするのも何となく嫌気がさして、自室から出て居間に行くと、島さんが何やらゴミ袋にまとめている。

「何してるの？」
島さんはエプロンで手を拭きながら、
「この家は、少し物が多いでしょ」
と言って、箪笥から母の洋服を何枚か取ると、その袋の中に投げ入れる。島さんが着ないのであれば、母の衣類もいらないかと思った。僕が着られるわけでもない。でも、心の中になぜか妙なしこりが残る。
美結はその後も、仕事にかこつけて何度かうちにやって来た。仕事に関係のない日でも僕が家にいない日でも、だんだんと仕事場に入り浸るようになった。島さんは僕たちを見ていつも嬉しそうに笑う。その顔を見ると、僕は何だか恥ずかしくなり、同時に、島さんだけには見られたくないというような、ある種の苛立ちのような気持ちも感じた。
奇妙な同居生活を半年程続けていたある日、決定的な出来事が起こった。
家に帰ると、島さんの他にもう一人、汚い格好をしたじいさんが立っている。島さんの夫が呼び戻しに来たのかと思い、僕は慌てた。
「島さん、その人誰？」
すると、いつものように笑って答えた。
「源さんよ。いつも庭の手入れやこうやって家の壊れた部分を修復してくれるの」
源さんと呼ばれた老人が、よれた帽子のつばを触って挨拶をした。
「いつも、みっちゃんにはお世話になってるんでね」
そう言われて、最近、島さんの指の傷が減ったことや時折爪にマニキュアを塗っていることを思い出した。この老人が、仕事を請け負っていたのだ。
「じゃあ、わしは次の用事があるから」
片手をひょいと上げて、源さんが出て行くと、僕は島さんを責めた。
「どうして他の人を家に入れたりするの」
島さんはぴんとこない様子で笑う。
「だって、源さんにはいつも手伝ってもらってるから」
「違う、そうじゃなくて」
大きな声で遮ると、島さんが固まる。
「ここは、僕と母さんの家なんだ。もう二度と他人を入れないでよ」
「坊っちゃん……」
島さんは僕をじっと見ていたが、視線を落とすとゆっくりとエプロンを外した。丁寧にたたんでいすの背もたれに掛ける。そして、そのまま静かに部屋から出て行った。バタンと扉が閉まる音がして、僕はようやく島さんが家からいなくなったのだと気付いた。
僕は身勝手だ。美結は何度も家を訪れるようになったのに、島さんが他人を家に入れることは許せないなんて。自分の気持ちをはかりかねて、右手で頭をごしごしとかきむしった。すぐに追いかけることもできず、部屋の中をうろうろと歩き回る。島さんが行きそうなところなんて全く思いつかない。島さんのことを縛ろうとするわりに、結局僕は島さんのことを何も知らないのだ。
でも、今追いかけなければ、一生島さんに会えないような気がして、夕暮れ時の街を僕は走り出した。スーパーやホー

ムセンター、近所の公園などを見回ったが、探せば探すほど、島さんが一人でこの街にやって来たのだということを思い知らされた。知り合いがいたわけでもなく、毎日をただ僕の世話をして淡々と過ごしていた島さん。どうして僕はそんな島さんを理解してあげなかったのか。そう思いながら走っていると、源さんが乗った軽トラを見つけた。

「あっ、源さん！」

僕が近寄ると、源さんは窓を開けた。

「どうした、坊っちゃん」

「島さんが行きそうなところ知りませんか」

「みっちゃんの行きそうなところねぇ」

源さんは眉間に皺を寄せて考えて、はっと目を見開いた。

「たぶん、沼じゃないか。地元にある湖に雰囲気が似てるとかで、よく買い物帰りに寄るって言ってたぞ」

僕は源さんに礼を言うと、沼に向けてまた走り出した。机にあった湖の写真を見て、少し寂しそうな顔をした島さんを思い出しながら。

薄暗い沼の土手に島さんの姿を見つけて、僕はほっとした。草を踏みしめる音に気付いて振り返った島さんも、安心したように小さく笑みを浮かべた。

「島さん、ごめん」

そう言って、隣に座った。

「いいのよ。坊っちゃんの言うとおりだわ。他人の私があなたの家を乱してしまって、こちらこそごめんなさい」

「他人だなんて言わないでよ」

少し間があった後、島さんは静かに話し始めた。

「坊っちゃんには私のことを何も話してなかったわね。私ね、北海道から来たのよ。どうして、あなたのお母さんがあなたを私に託したかわかる？」

「昔の知り合いだったから？」

「ええ。私たち、学生時代からの友人でね。結婚してから、私が北海道に行ってしまって、会う機会は減っていたんだけど」

島さんは迷いながら、少しずつ言葉を発した。

「私も息子が一人いたの」

「今も北海道にいるの？」

「いいえ、二十七歳の時に死んだのよ」

「病気で？」

島さんは小さく首を振った。

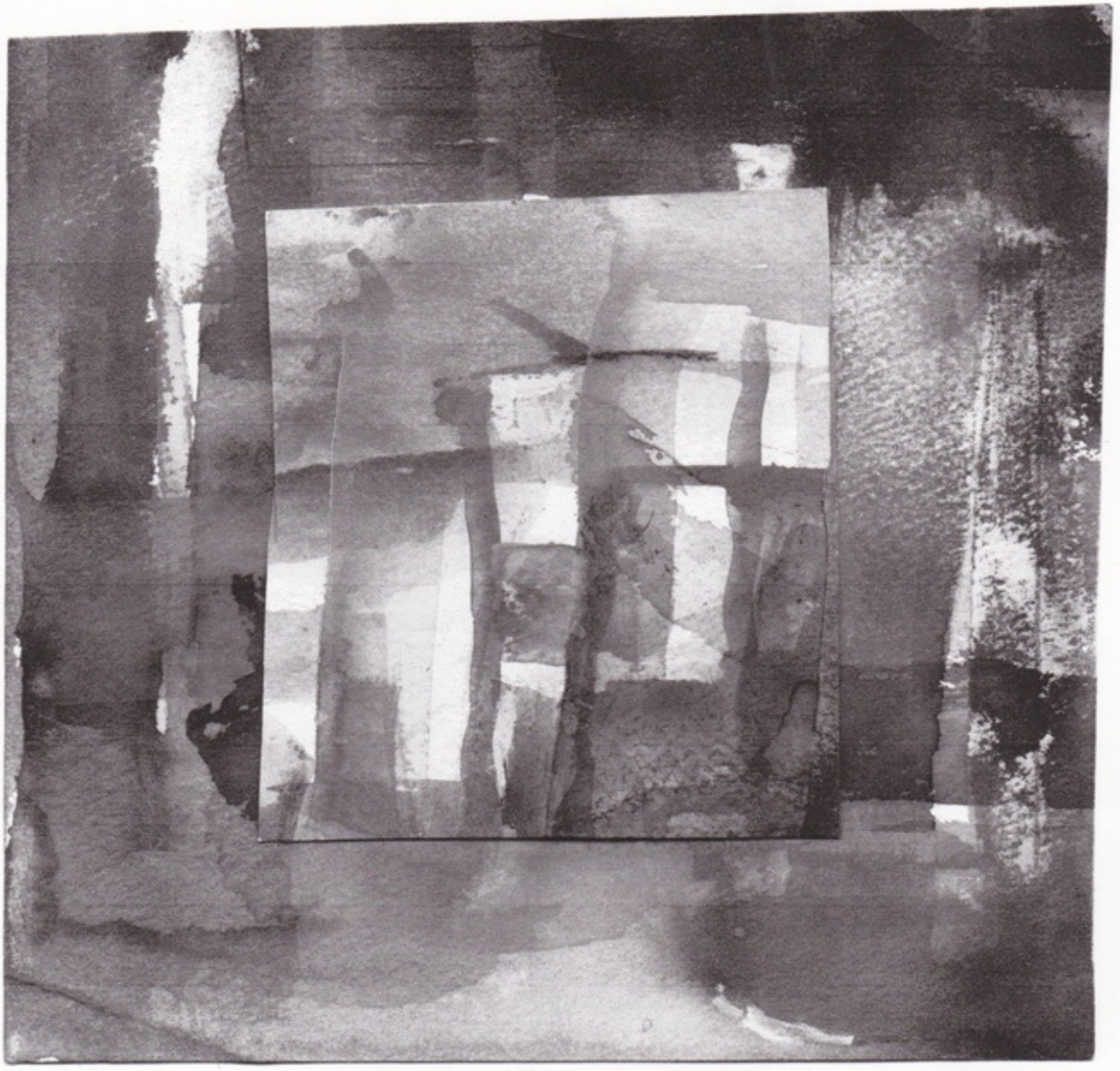
「自殺したの」

僕が黙ると、島さんは息を吐いた。

「その日、朝ごはんができても自室から出てこないから、部屋に行ってみると、ベッドの枠にタオルをひっかけて首を吊っていたの。一緒に暮らしていたのにね。毎日話していたのに、何に傷ついていたのか、何を辛く思っていたのか、全く知らなかったのよ。遺書もなくて、どうして死んでしまったのかわからなかった。亡くなった後もずっと考えていて、結局わかったことは、私は彼のことを何も知らなかったんだってことだけだったわ。それから随分経った後、旦那も亡くなって一人で暮らしていたの。そんな時にあなたのお母さんから手紙が届いたのよ」

「息子を亡くした島さんに、母さんは僕のことを託したかったんだね」
肯く島さんを見ながら、僕は言った。
「親友がうけた悲しみと、僕を残していなくなる辛さが重なったんだ」
「そうだと思うわ」
日はもうとっぷりと暮れて、沼もただの暗闇になってしまった。
「そろそろ家に戻らない？」
返事がないので、もう一度呟いた。
「島さん、そろそろ帰ろう」
島さんはうつむいたまま、静かに言った。
「ごめんなさい。今日は帰るけれど、明日になったら、私、あの家を出て行くわ」
「どうして」
戸惑った僕の肩を島さんは抱いた。
「前に聞いたわよね。息子でもないのに、どうして良くしてくれるのかって」
近づいた島さんの息が顔にかかる。島さんは涙で声が震えている。
「あの時、私は息子の姿をあなたに重ねて、罪滅ぼしをしようとしていたんだと気付かされたの。新しい生活を始めたつもりが、息子を引きずっているままだったのね。でも、あなたはあなたなのよ。私と一緒にいたら、あなたは良さをなくしてしまう」
僕が自分を失うと同時に、島さんだって島さんの生活を失ったのだ、と思った。僕だって、島さんに母の姿を重ねて、島さんの自由な生活を踏みにじったのだ。母と暮らせなかった時間を取り戻している僕と、亡くなった息子との時間を取り戻そうとしていた島さん。でも、このまま互いにいなくなった人の面影を追いかけながら生きてはいけない。誰かを代わりにすることなんてできないのだ。島さんと過ごした時間は大切だったけれど、このままずっと一緒にいるわけにはいかない。
立ち上がり、島さんの手を取った。島さんは尻をはたきながら、僕の手をぎゅっと握った。僕たちは手をつないだまま、とぼとぼと家路を歩いた。
そうして、僕たちは同居生活を解消した。それと同時に、実家を売り払った。そこにあるから、僕はずっと帰る場所にしてしまうのだ。何もなければ、僕の心のなかだけで永遠に母は生き続ける。僕が移動する、どこでだって。一緒に生き続けるのだ。
僕はまた、連載を抱えて旅に出た。

（了）



Philosophy of Stardustbooks

惨めだったのか。他人も、自分も不幸せなやつだと思っていたのか。そうかも知れない。しかし、子供の頃から、ポケットに星屑をつめていた。いつもこころ細い時にはポケットのなかの闇をまさぐった。明るい絶望というものだってあるのさ。真暗なポケットに宇宙があり、希望の星はそのうちに太陽系に飛びだす。うつむいて歩きながら、そう考えていた。あの頃、辛さと屈辱を味わったはずなのに、いまは懐かしい。たぶん人にとって大切なことはポケットの中の星屑なのだ。

浅井慎平「ポケットに星屑を」

Philosophy of Stardustbooks

——文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているんだろうか？」
そう思ったとき、手にとった雑誌が教えてくれた。
“あなたは、一人ではない”　自己表現して、セカイとつながる。

スポーツが好き。アウトドアが好き。決して嫌いなわけではないけど、たまにみんなとノリが合わないときがある。

小説が好き。映画が好き。漫画が好き。でも、オタクと呼ばれる人たちとは少し違う気がする。

ひとりで考え込み、ノートに書きつけ、誰かと出会いたいと試行錯誤を繰り返す。

そんな人たちがつながり、自己表現する場をつくります。

星屑書房
STARDUST BOOKS

星屑書房は文化・芸術活動を推進する団体です。

stardustbooks@live.jp　http://stardustbooks/soragoto.net/

編集後記

編集後記

一路 真実

10回目の引越と10月10日の記念日が、
願いは叶うということを教えてくれました。
だから、この作品を書きました。
あとは専業小説家になるだけです。

竹中 優子

色々賞などに応募しておりますが、
現実は厳しいですね。う～ん。
めげずにがんばろうと思います。

間々えいよ

焼き魚定食が好きだ。
そして魚を綺麗に食べる人が好きだ。

松田 定幸

詩の方のタイトルに表記されている振り仮名(ルビ)は、
必ずしも本来の意味だったり、
直訳とは限らないものがあります。
悪しからずご了承下さい。

馬場 貴生

まちづくりばかり勉強してて、作家業がおろそかです。

天沼 太郎

先日書いたシルヴィ・ギエムが、本年末にとうとう引退。
引退公演が何故か日本という幸運。
会社サボって出かけます。
ご興味のある方は要チェックです。

詠人不知

きみにさちあれ

To's job

水彩をはじめました。
色と形・・・悶々とした日々が続いています。

マチコ・サイコロトーク

警察24時的な番組が好きでついつい見てしまいます。
で、ネコ相手に「容疑者確保！」とか言って
ごっこ遊びしてます。

星屑書房は好き勝手に表現活動をしていく文化系サークルです。
現在は、フリーペーパーの制作・配布が中心ですが、
今後は幅広く、文化系活動をしていく予定です。
本を読むことが好き。本を自分で作ってみたい。
映画を観ることが好き。映画を撮りたい・・・
などなど、文化系趣味を持つ人々をつなぎます。
社会人が中心ですが、誰でも入会ＯＫ！
「こんな活動してみたい！」という提案募集中☆
少しでも興味を持たれた方はこちらにご連絡ください！
お待ちしています！

stardustbooks@live.jp

創星　第 12 号

2015 年 10 月 11 日　初版

発行元　星屑書房

http://stardustbooks.soragoto.net/

©2015 STARDUST BOOKS, Printed in Japan.
本書を無許可で複写・複製することは，著作権法上での例外を除き，禁じられています。